

受験番号

令和七年度 徳島文理中学校 前期入試 国語

- ・ 字数制限がある場合は、句読点や符号なども含むものとします。
- ・ 解答は解答用紙に、楷書^{かいしよ}で、はっきり、ていねいに書きなさい。

第一問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

電車が遅れたせいで授業に間に合わなかったとき、遅刻ちこくをなかったことにしてほしいと思いますか。これについて次の事例を考えてみてください。

ケース1 遅刻をなかったことにしてほしい！

4月、中学3年生になったばかりのタツルくんは、電車で学校に通っています。家の最寄り駅ちよりから2つ隣の駅まで電車に乗ります。ある日うっかり目覚まし時計をかけずに寝てしまいました。翌日、起きるとなんと始業40分前です。急げば家のドアから学校の教室まで30分で行くことができます。ギリギリ間に合うと思って走りましたが、駅に着くと電車が15分遅れています。結局、教室に着いたのは授業がはじまって20分後でした。

運の悪いことに1時間目は、きびしいハルカ先生の授業でした。ハルカ先生は、やっぱり「なんで遅れたの！」と怒おこっています。タツルくんは、「電車が遅れなければ間に合っていました。僕のせいではなく電車の遅れが原因なので、遅刻をなかったことにしてほしいんですが……」と言いました。すると、ハルカ先生に「そんな理由にならないでしょ！電車は遅れることがあるんだから、早く家を出なさい！」とますます怒られてしまいました。タツルくんは「すみません……」と言ってその場をやりすきましたが、「学校に遅れたのは、電車のせいじゃん……。遅刻をなかったことにしてほしいよなあ」と納得なっとくできず、もやもやしたまま一日をすごしました。

鉄道会社は、時間どおりにお客さんを運ばなければならないのでしょうか。また、電車が遅れたことを理由に遅刻をなかったことにできるでしょうか。

ケース1では、2つの契約が隠れています。1つは、タツルさんと鉄道会社の契約です。もう1つは、タツルさんと学校の契約です。

実は、わたしたちが電車に乗るとき、鉄道会社と契約を結んでいるのです。契約とは、約束を結ぼうとする人たちの意思表示（考えを表すこと）が合致することで成立する約束のことです。たとえば、買い手が「コーラを100円で買いたい」といい、売り手が「いいよ」といえば契約が成り立ちます。「コーラを100円で買いたい」というのを申込みといい、「いいよ」という返事のことを承諾といいます。申込みと承諾によって契約が成り立つと、お互いに権利と義務が生まれます。売り手には100円をもらう権利と、コーラをわたす義務があります。買い手にはコーラをもらう権利と、100円をはらう義務があります。いったん契約を結んだら、義務を果たさなければなりません。義務が果たされない場合は、裁判所に訴えて義務を果たすように強制することを求めたり、損害賠償を請求したりすることができます。

タツルくんが電車に乗るときに結んだ契約は、鉄道会社がお金と引きかえにお客さんがある駅から別の駅まで運ぶというものです。この契約では、電車の遅れについてはどのようになっているのでしょうか。鉄道会社のホームページに載っているルール（これは約款とよばれます）を見てみましょう。

A、ある鉄道会社の約款には、「電車が2時間以上遅れて駅に着いたときには、責任をとって運賃を払い戻します」とあります。ここに書かれていること以外について、鉄道会社は電車が遅れたからといって責任をとる必要はないのです。15分遅れたからといって鉄道会社は義務を果たしていないとは言えません。

現実には、電車が遅れて損をしたからお金を払ってほしいと裁判を起こした人がいました。その人は、電車に乗って仕事に向かっていたのですが、電車が何度も遅れて仕事に間に合いませんでした。そして、「仕事に遅れて、知人との待ち合わせにも遅れた。そ

B、電車が

のせいで取引先や知人に信用されなくなってしまった。C、精神的にも大きな被害ひがいがあった」として、鉄道会社にお金の支払いを求めて裁判を起こしました。

この人は、鉄道会社の責任を制限する約款が無効だといいましたが、2006年に東京地方裁判所は判決を下し、この約款は【X】としました。その理由は、鉄道会社が電車の遅れの責任をいちいちとってお金を払っていたら、安くたくさんのお客さんを運ぶことができなくなるからです。鉄道会社の契約上の義務は目的地までお客さんを運ぶことで、おおはば（大幅に遅れたとき以外は）時間どおりにお客さんを運ぶ義務はないということなのです。

D、鉄道会社が遅延ちえん証明書を出すときもありますよね。タツルくんが遅延証明書を手に入れて「遅延証明書があるから学校は遅刻をなかったことにしなければならないはずだ」といった場合はどうなるのでしょうか。実は、遅延証明書は単に電車が遅れたという事実を表しているにすぎません。そのため、遅延証明書の扱いあつかについては、タツルくんが【Y】と結んだ契約の内容に従わなければならないのです。

（中略）

契約ということからタツルくんの遅刻をもう一度考えてみましょう。タツルくんと鉄道会社で結んだ契約は、約款によれば時間に遅れないということは書かれていません。そのため鉄道会社に責任はありません。タツルくんと鉄道会社の契約は、公序良俗りょうぞくに反するものではないですし、勘違いかんちがで結んだ契約ではありません。そうすると、タツルくんの「遅刻をなしにしてほしい」という言い分はハルカ先生に聞き入れてもらえないのでしょうか。

ここで、タツルくんと学校とで結んだ契約が使えるかもしれません。学校によっては入学するときに、「校則に従います」というような書類に生徒と保護者のサインを求めることがあります。この契約にもとづくと校則にどのように書かれているかということが重要です。校則に「交通機関に混乱が生じたときには、遅刻として扱わない」といったことが書かれていれば、その契約を理由

にして「遅刻をなしにしてほしい」ということができるでしょう。

(小貫 篤おぬき あつし)

『法は君のためにある』

問一 ☐ AとDに入る言葉を次からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア それとも

イ ただし

ウ また

エ なぜなら

オ たとえば

カ つまり

問二 傍線部ほうせん「この人」とありますが、どのような人ですか。本文中から三十字で探し、初めと終わりの五字を書き抜きなさい。

問三 「X」に入る漢字二字の言葉を考えて書きなさい。

問四 この文章において「契約」とはどういうものとされていますか。本文中から四十字以内で探し、初めと終わりの五字を書き抜きなさい。

問五 ある中学校に通う生徒フミヤとリカコが本文を読んで話をしています。それを読んで後の1と4の問いに答えなさい。
フミヤ…タツル君の気持ち、よく分かるよ。

リカコ…フミヤ君はいつも学校にギリギリに来るもんね。この文章は中学生の私たちの立場になってケースを挙げてくれるから、分かりやすい文章だったわ。

フミヤ…電車が6分遅延したことによって、僕が授業に遅刻した場合はどうなるんだろう。

リカコ…同じように考えることができるんじゃないかな。二つの契約を確認する必要があるね。

フミヤ…鉄道会社との契約と **ア** との契約だね。

リカコ…まずは、前者から確認してみよう。ホームページで約款を確認したところ、「特急列車が、到着時刻より2時間以上遅れた場合は、特急料金の全額をお返します。」とは書いてあるけれど「到着予定時間に遅れない」ということは書かれていないよ。つまり、電車が5分遅れたことに対する鉄道会社の **イ** はないということになるね。

フミヤ…でも、ホームページには「対象路線で対象の時間帯に5分を超えて遅れが発生した場合、遅延証明書を発行（掲載）する」と書かれているよ。6分遅延した場合、遅延証明書をもらえることになるよね。この証明書を理由として、学校の遅刻をなかったことにするように主張できないかな。

リカコ…フミヤ君、本文にも書かれている通り、遅延証明書は **ウ** だけだよ。だから遅延証明書の扱いは **ア** にゆだねられているんだよ。

フミヤ…そうだった。じゃあ、**ア** の契約を確認してみなくちゃ。生徒手帳には…：：：そのような汽車の遅延による遅刻の記載はないみたい。じゃあ、やっぱり遅延証明書をもって先生に直談判、泣き落としするしかないってことかな。

リカコ…ちよっと、フミヤ君！数十分の遅延ならともかく、たかが6分でしょ。

エ

フミヤ…ううっ、痛いところをついてくるなあ。分かっているけれど、朝の6分って結構大変なんだよ。

1 アと本文中の「Y」は同じ言葉が入ります。本文中から探し、漢字二字で答えなさい。

2 イに入る言葉を本文中から漢字二字で探し、書き抜きなさい。

3 ウにあてはまる言葉を本文中から二十字以内で抜き出し、初めのと終わりの五字を答えなさい。

4 エに入る会話を、自分で考えて書きなさい。

問六 次の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

1 イサギヨクあきらめる。

2 金銭のタイシヤク関係。

3 トラックでユソウする。

4 私鉄のエンセンに住んでいる。

5 キリツ正しい生活を送る。

第二問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二千五百年以上前、中国の魯の国に生まれた孔子は、深い学識と思想の持ち主であつたが、その信念ゆえに、全然出世ができなかった。季路・閔子騫など十人の弟子達とともに、様々な国を遊説（自分の意見・主張などを説いて歩くこと）して回るが、その途中で重い病に伏せてしまう。

「先生を生かすためなら、俺は何だってやるつもりだ！それが、先生の意志に背くことになろうとも！」
見ると、孔子の家の門の前で、季路と閔子騫が言い争っている。

「落ち着け。大声を出すな。先生に聞こえたらどうする」

興奮する季路を、閔子騫はなだめようとしていた。二人を中心に、他の弟子たちも集まっている。顔淵と仲弓は、閔子騫と一緒に季路を落ち着かせようとしていた。冉有も近くにいたが、言い合いを前にオロオロしている。どっちに味方していいかわからずとまどっている周りの弟子の中には、子夏の姿もあつた。子夏は、子貢が来たのに気づくと、助けを求めるようにすがりついた。

「子貢先輩！何とかしてください！」

「一体、何があつたんだ？」

「それが……季路先輩が、先生の病魔を払うために、鬼神に祈祷を捧げると言い出して……」

「祈祷を？」

（中略）

季路は、とても冷静な状態ではなかった。君子の^Y理想とは程遠い取り乱し方をしている。しかし、それを誰が責められるだろう。同世代の弟子の中でも、季路が一番早く孔子に弟子入りした。今集まっている弟子の中では、誰よりも長く孔子とともに過ごしてきたのだ。

季路は、孔子が倒れてからというものの、ほとんど寝ずに^a看病を続けている。そのあまりの真剣さに、他の弟子たちも、季路が孔子に会うことだけは制限しなかった。孔子が死んだら、死後の世界までもついていって、弟子として付き従いそうなほどの献身ぶりだった。

「とにかく一度、落ち着くんのだ。どうしたって先生はお前の祈祷をお認めにはならないだろう。先生が手本とする古代の聖人たちの教えの中にも、そんなものは出てこないのだから……」

「いや、そんなことはないぞ」

突然、言葉をさえぎられて、関子騫はハツとして振り向いた。周りの弟子たちも、声のしたほうに視線を向ける。家の中から、一冊の本を小脇に抱えて出てくる者がいた。それは宰我だった。

「部屋を借りて、ちよっと調べ物をしていたんだ。先生の家ほど、学問の資料がそろっている場所はないからな。それで、見つけたよ。かつての聖人の教えを先生自身がまとめて編纂した本の中に『爾を上下の神祇に禱る』（あなたのことを思つて、天地の神々に祈る）という一文が出てくる」

「何だって？」

「ほ、本当かつ？」

驚く関子騫と季路に、宰我は【 A 】微笑んで本を開いて見せた。

「ほら、ここだ。神々に祈りを捧げる、つまり祈祷することは、古代の聖人たちも認めているということだ。ならば、彼らを手本とする先生がそれを認めないのもおかしい話さ」

関子騫と季路は、食い入るように宰我の手にした本を見つめた。そこには、確かに宰我の言う通りの**記述**がある。

「しかし、こんなわずかな記述で……」

うるたえる関子騫に、いつもの皮肉な調子で宰我は言った。

「わざわざがなんだろうが、書いてあることは確かだ。先生が、自分の書いたことに責任を持たないというなら話は別だが」
宰我もまた、季路たちが続いて同じ頃に弟子入りした仲間だ。弟子の中でも、一、二を争うと言われる**弁論**の腕前も関子騫は昔からよく知っている。こうやって、ささいだが確かな糸口を見つけてきたのも、まさにその**手腕**のなせる**業**だろう。

しかし、それだけに意外だった。これまで宰我が自分の力を使うのは、常に自分自身のためだった。それを、季路を助けるために使うとは……。

自分を見る関子騫の顔から、**①その考え**を読み取ったのか、宰我は「ふん」と鼻を鳴らした。

「祈祷ぐらいさせてやらなきゃ、おさまりがつかないだろうと思ったただけだ。ほっておいたら、うるさくってかなわない」

「宰我、恩に着るぞ……!」

【 B 】、季路は本をつかんで家の中へ駆け出した。これなら、先生に認めてもらった上で鬼神に祈祷を捧げることができ
る。周りが驚いて引き止めるのも聞かず、季路はそのまま孔子の部屋へと走って飛び込んだ。

弱った体を布団に横たえて眠っていた孔子は、その騒々しさにうつすらと目を開けた。

「先生、お願いがございます!」

季路は孔子の枕元まくらもとに近づくと、息を弾はすませて言った。

「……ほう、なんだね？」

孔子は弱々しく微笑んで聞いた。その声はひどくかすれている。

「祈祷ぎしきの儀式をさせていただきたいのです。先生のご病気を治すための祈りを神々に捧げたいのです」

「いきなり何を言い出す。そんな祈祷は……」

「手本となる古代の聖人の教えにもないとおっしゃいますか？ いいえ、あります。あるんです。先生自身がお作りになったこの本の中にも、しっかり書いてあります。ほら、ここに！」

季路は、先ほど宰我から受け取った本を孔子に突つきつけた。

同時に、季路を追いかけてきた他の弟子たちが、部屋になだれ込こんできた。

(中略)

季路はさらに何か言おうとしたが、孔子の目を見て言葉に詰つまった。孔子の目は今やはっきりと開かれ、病人とは思えない深く力強い。眼差めざしいで季路を見据みえている。そして孔子は、かすれた声でゆつくりと言った。

「季路、私は君に祈ってもらわなくても、もう自分自身で祈っているよ」

「先生が、ご自身で？」

意外な言葉に季路は戸惑とまどった。それは閔子騫や他の弟子にとっても思いがけない返答だった。

「ああ、もう何十年も続けて私は祈っている。わからないかな？」

孔子は重そうに首を動かして、弟子たちを見回した。みな意図いどをつかみかねている様子だった。顔淵だけが何か思い至いたったよう

な顔をしている。じっと思案している子貢はもう少しというところだろうか。孔子は閔子騫たち年長者から冉有たち、そして子游や子夏、仲弓、さらにそれより若い弟子たちの顔まで視線をめぐらせてから、季路に言った。

「②析るといのは、そもそも何をすることかな？」

「それは、神々に自分の願いを……」

言葉をさえぎるように、孔子の目がまたじっと季路を見つめた。

「願い？なるほど、その願いというのは？」

「……」

季路は答えるのをためらった。何をしようと、たとえ道を誤ろうとも、孔子を救いたい。そう思っていた。しかし、孔子本人の前にすると、その考えはずいぶん独りよがりなものに感じられた。

やがて孔子のほうに――再び口を開き、かすれた声でゆっくりと言葉をつむいで話し始めた。

「自分の私情や私欲から出た願いを、神々を頼ってかなえてもらう。それでは神々を自分勝手に利用しているのと同じではないか。むしろそうした個人的な事情や欲望に打ち勝つこと。そして、神々に対してなにひとつ恥^はじるところない、神々の御心^{みこころ}にかなう人間として生きることこそ、本当の意味で神々を敬^{やうやうやう}い、祈りを捧げることだと私は思う。そうではないかな？」

季路は、これまで見向きもなかった神々を、追い詰められて急に頼^{たよ}ろうとした自分の【 C 】に気づかされた。季路は自分の成長のなさにうなだれるしかなかった。

「念のため言っておくが、私は決して天地の神々や人知を超えた偉大^{いだい}なるものの存在を、否定してもいなければ、軽んじてもない。神々や天命といったものを崇^{あが}めていればこそ、それに恥^はじないように、今日まで正しい道を歩み深める努力をしてきた」

孔子は、浅い呼吸を整えてから続けた。

「以前、^{はくぎゅう}伯牛にも同じような話をしたが、神々や天命というものは、何もせず頼ったり、逆に打ち負かそうとしたりするものではない。ただ^③それに恥じぬように生きればいい。それこそが真の祈りであって、そういう意味で、私は祈りに祈り抜いた人生を送ってきたつもりだ。持ってきたその本の言葉にある祈りも、同じように、決して自分勝手な願いをかなえるための祈りのことを言っているわけではない」

孔子の声は、いつもと違っつか細く、はかない。しかし、その言葉は変わらず^{しん}芯の強い、確かな^{ひび}響きを保っていた。

季路は打ちのめされたような顔になって、床にこすれるほど頭を下げた。

「先生、まことに申し訳ありません。私の浅はかな心のせいで、かえって先生のご心労をつのらせてしまったようです」

孔子は^{ほが}朗らかに笑って答えた。

「何事も、こうして経験し、学んでいけばいい。それに少なくとも、君が私のことを思ってくれる心は、身に染みる^しほどうれしい。それから、この本の言葉は、きつと看病で忙しい季路とは別の誰か……宰我あたりが見つけてくれたんだろう？」

言い当てられて、宰我の顔は赤くなった。

「宰我が自分のためでなく、季路や私のために力を使ってくれたのも喜ばしいことだ。誰かのためを思って動く心は、私たちが歩むべき道の種となる。人が人を思いやる心、それこそがすべての根本だ。ただ、私の肉体を生かすために、私の大切な精神を殺すようなことはしないでほしい。私は永遠に生きたいと思っている。古代の聖人から受け継いだ道を君たちに伝え、それがさらに下の世代へと受け継^つがれていく限り、私の精神は永遠に生き続けていくんだ」

弱々しい息をふりしぼるようにしてそこまで言うと、孔子はふたたび、周りの弟子たちを見回した。物事の本質まで見通すよう

なその目は、いつにも増して深く澄すんでいる。まるで遠く太古の時代から、今ここにいる弟子たちの未来まで、いや、それより先の宇宙の果てのような未来までを、同時に見つめているような目だった。

その目を前にした弟子たちは、自分の中の卑いやしい小さな心などすべて忘れて消え去ってしまうような、神聖な気持ちにさえなつた。

「私のために神々に祈ってくれるなら、どうか清らかな心を持って、正しい道を歩んでくれ。その中で、どうか④私の精神と理想を伝えてくれ。それが私のために祈ってくれるということだ。ああ、少し話し過ぎて疲れた。私は大人しくまた眠るとしよう。みんなも一休みしなさい」

その翌日から、不思議と孔子の体調は快方に向かった。

この日、孔子はまだまだ未熟な弟子たちから、いくつかの成長を感じとっていた。

孔子が新しい気力を持って、元の通り彼らに講義を行うまでに回復したのは、それからまもなくのことだった。

(森久人・下村湖人原作『出世できない孔子と、悩める十人の弟子達』)

問一 二重線部^x「背く」・^y「理想」の対義語を書きなさい。

問二 本文中の(A)・(B)・(C)に、次のア～クの中から言葉を補い、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|--------|---|---------|---|------|---|------|
| ア | 言うやいなや | イ | 浅ましさ | ウ | 得意げに | エ | 半信半疑 |
| オ | ずるがしこさ | カ | とまどいながら | キ | 考え深さ | ク | 不安げに |

問三 傍線部①「その考え」とありますが、関子鸛はどんなことを考えますか。五十五字以内で書きなさい。

問四 傍線部②「祈るとく何をする事かな」とありますが、孔子は祈りを捧げることをどうすることであると考えていますか。本文中の言葉を使って五十字以内で答えなさい。

問五 傍線部③「それ」が指すものは何ですか。五字で書き抜きなさい。

問六 傍線部④「私の精神と理想」とありますが、孔子の「精神と理想」について、本文中の言葉を使って六十五字以内で説明しなさい。

問七 本文の内容を説明したものとして、最も適切なものはどれですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一番早く孔子に弟子入りした季路は、仲の悪い幸我が頼み込んで鬼神に祈禱を捧げるために、孔子の本を探すよう頼んでいる。

イ 関子鸛は、皮肉屋の幸我が自分自身のためだけでなく人のためにその力を使っていることに、彼の成長を感じ喜んでいる。

ウ 幸我は柄にもなく自分が季路の手助けをしたことに戸惑いを感じているが、孔子の病気がよくなるように祈禱したがっている。

エ 孔子は季路の心づかいがうれしいと感じると同時に、弟子達には清らかな心を持って、正しい道を歩んで欲しいと願っている。

問八 本文中の波線部 a ～ e の漢字に読みがなをつけなさい。

a 看^{かん}病^{びやう}を^を続^{つづ}け^けて^てい^いる。

b 記^き述^じが^があ^ある。

c 深^{ふか}く力^{りき}強^かい眼^{がん}差^さし。

d 意^い図^ずをつ^つか^かみ^みか^かね^ねる。

e 神^{かみ}々^々を^を敬^{けい}い^い祈^{いの}り^りを^を捧^{たも}げ^げる。